

教師の 腕前診断

文 | 城ヶ崎滋雄 (千葉県公立学校講師)
イラスト | 吉田朋子

今回のテーマ

手拍子だから 集中力を高められる

子どもの話し合いを終わりにさせたい時にはどうしていますか。おそらく多くの先生は「終わり」「時間だよ」と口頭で伝えているのではないのでしょうか。

ですが、子どもたちはすぐに止めるでしょうか。先生の注意の声が小さかったり穏やかな口調だったりした場合はそうなりません。反対に、大きな声なら静かになります。強い指導には瞬間的には従うのです。

今回は「静かに」と言わなくても静かになる方法を紹介します。

1 音が集中力を引き出す

話し合い活動はタイムアップとなりました。先生は、「終わりです」と告げますが、話し合いを続けるグループがあります。再度「終わりです」と言うのですが、まだ終わりません。

Q1

どうやって話し合いを
ストップさせますか。

- ① 大きな声で「終わりです」と指示する
- ② 「パンパン」と手拍子を打つ
- ③ 静かになるまで待つ

①はよく見かける光景です。子どもの注意を先生に向けさせるには大きな声を出すこと。至極真っ当な発想です。

実はそこに問題があるのです。大きな声を発する際、「何で指示を聞かないのだ」という不満が先生の心の大半を占めています。注意してもいいのですが、我慢して蓋をし

す。我慢は怒りに変わります。それが大きな声になるのです。大きな声になるとその時に抱いた感情も大きくなります。この時の感情は「怒り」です。怒りを自ら大きくさせているのです。それはやがて炸裂します。

指示が全員に伝わるわけではありません。大方の子どもは教師のほうを見て話を聞く体勢を整えるなか、喋っている子どもは目につきま。オセロに例えると、白のコマの中に黒のコマが数個あるようなものです。当然、教師の注意の対象になります。

大きな声を出すということは、ポジティブなことであれば賞賛・感激となりますが、ネガティブなことであれば落胆、叱責となります。声の大きさは心をコントロールするのです。

いっぽう、③のように待てば、やがて静かになります。

先生の指示を聞いている子どもは必ずいるものです。その数は少数でもやがて多数に変わります。

ただし、我慢して待たなければなりません。「早く静かにならないかな」という期待から「いつまで喋っているんだ」という苛立ちとなり、ついには「もう我慢できない」という怒りに変わります。私は②のように「パンパン」と手拍子を打ちます。

子どもたちの話し合いは声です。それに対して、先生の「静かに」も声です。声と声は溶け合い、同質となります。違和感を覚えないので、集中力を高めることにはなりません。

それに対して、「パン」という手拍子は音です。人は異質なものに反応します。音がするほうに意識を向けます。例えば、雨が窓を叩く音が



すると、外を見てしまいます。サイレンの音が聞こえると、「どこだろう」と首を回してしまいます。音の所在を確かめることで間ができます。それが一瞬の沈黙となり、波紋のように広がり、静かになるのです。

2 音に同調させて集中力を引き出す

「パンパン」という音、手拍子に子どもたちは反応します。とはいえ、全員が一斉にそのなるわけではありません。

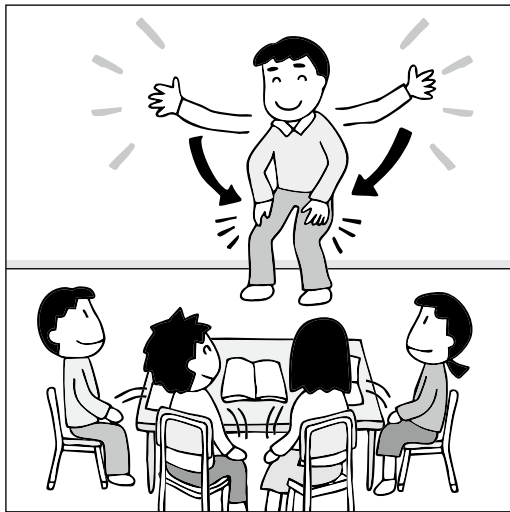
できれば同調して欲しいものです。そうすれば教師の話聞く準備が整います。

Q2

どんな手拍子なら子どもたちが
同調するでしょうか。

- ① 間を置いて「パンパン」を繰り返す
- ② 「パン パン パンパン」と打つ
- ③ 三三七拍子

教師の腕前が試される、学級経営のひと工夫。
ベテラン先生によるケーススタディです。
こんな時、あなたならどうしますか？



①を繰り返せば、子どもは静かになります。その際、先生は、「パンパン、静かに」と繰り返すはずですが。「静かに」には否定的な意味が含まれています。「うるさいから静かに」という現状否定、「静かにしなさい」と言っているだろう」という否定、怒りです。繰り返すことでそれらは高まります。ネガティブな思いが強調されると怒りとなります。

静かになっても、「やっと静かになったか」と不満を持ちます。それは、「なんで早く静かにならないの」という愚痴となり、説教に繋がります。

②や③のような手拍子は、後に続きたくなくなります。

③の三三七拍子の場合、「パパン パパン パパン パン」と聞き覚えのある調子が頭に浮かびます。そうすると、つい手拍子を打ってしまいます。話をやめさせるには効果的です。だからといって三三七拍子を採用はしません。なぜなら「3回・3回・3回・1回」の一本締めを

3セット行う三本締めがボビュラーだからです。1セットが終わると、「イヨッ!」、2セットでは「もう一丁」と合いの手が入り、3セットが終了すると、「ありがとうございました」と拍手が起ります。ここでは静かにするどころか、賑やかになってしまいます。

私は②を行っています。三三七拍子と違って「パンパン」で終われるからです。

これも馴染みのある手拍子です。教師の手拍子は次の手拍子を予想させます。

打ち上げ花火が上がる時、「ビュー」と音がします。これは花火の一種で、「笛」と呼ばれるものです。花火が開く前の期待感を高めるための演出です。花火師は注目して欲しい花火にだけ「笛」を仕込んでいます。

先生の手拍子も「笛」と同じ効果があります。最後の「パンパン」を想起させ、教師と同じタイミングで手拍子が始まり、同じタイミングで手拍子が終わります。

教師は手拍子を終わると両手を大袈裟に広げ、膝の上に置きます。子どもも同じ動作をして、話を聞く体勢となります。

3 手拍子の効果

手拍子を打ちながら話ではできません。自ずと、話し合いも止みます。

ここで「よく話し合いを止めたね」とほめたら子どもたちはどう思うでしょう。子どもたちは、自分の意図しないことをほめられても得心しません。それどころから、「話し合いをやめさせようとして先生は手拍子をさせたのか」と見透かされてしまいます。

「よく気づいたね。手拍子をしてくれてありがとう」と告げたらどうでしょう。教師の意図は察知されずすみみます。手拍子はお楽しみであり、ゲームでもあります。いずれにしろ、手拍子を打つことで話し合いを止めるという効果があります。

一方で子どもにとってもメリットがあります。心理的な効果、「一体感」です。

手拍子を「歌」に例えるとそれがわかります。声が揃うと心地よいです。みんなの気持ちが一つになったという一体感を覚えます。「仲間」を実感する時です。

手拍子でも一体感を味わえます。揃ったという心地良さ、友だちに遅れないで手拍子を打たという安堵は、教室を居心地の良い空間に変えます。

歌は余韻に浸れます。達成感が訪れることで話し合い活動は円満に終わります。しかし授業はこれからです。

その点、手拍子は心を軽くしてくれます。次のステップへの楽しみとなります。

一方で、手拍子ができなかつた子どもはどんな気持ちになるでしょうか。話を止めなかつたという罪悪感を覚えずすみみます。話し合いに夢中になっていた他人の声は聞こえないものです。それだけ白熱した話し合いだったとも言えます。

とはいえ、手拍子に反応できなかったというくやしさがありません。そのことで、「次はみんなと一緒に手拍子しよう」と強く意識します。それは一種のゲーム感覚です。子どもたちが注意されたという気分させずに、行動を改めるきっかけになります。